種を播く

〔日〕岡松慶久

科学出版社

種を播く

岡松慶久

私の人生設計

岡松慶久
1913年生

私は七十才になったら一切の勤めや役職をやめて全く自由の身になって自分の人生の仕上げの生活に専念する決心をした　それは全く何等の背景もない一個人として七十才から自分が一番やりたい事　即ち文化の華が美しく咲いた方面に尽力することです

私が過去の生活で身につけたあらゆる智恵や体験や又先人から学んだ教えの全部を傾注した常に自己の能力や経済力等もよく考えて己の能力を最も

有効に活用することです そして此西方面を一つの
ものとして永年受け続けて来た社会の恩恵恩
顧にいささかでも御恩返しをさせて頂くことです
現在の私の日々の行動の瞬間瞬間は過去に受けた
全ての力の凝集であると同時に未来への輝かしい輝
かしい出発点である事も決して忘れず魂に銘じて
日々実行と実績を積み重ね続けてゆきたいのです
そして与えられた天命の有る限り過ぎ去ったら再

び帰らない私に残された真に大切な大切な残り少
い短い時間を専ら此の目標達成丈けに使い続け
たい決心です　例え私の天命の終末が到来した時
でも何等変ることなく此決心を持続けて担々と
死も亦輝かしい輝かしい希望に満々た未来世界
えの意義深い出発点の第一歩と思惟し続けて
ゆきたい強い念願で一杯です

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

年頭にお年賀を頂き有難う御座居ました

本年は別紙の様な計画で着実に前進を続ける心構です　どうか御指導の程伏して御願申し上げます

本年も益々御活躍の程お祈り申し上げます

平成七年一月吉日

岡松慶久

目次

大正二年――昭和九年（一九一三―三四年）　1
生い立ち、幼年の頃……2
父のことと私の精神生活の根っこ……4
母、祖父母……10
小学校・中学校の頃……13
専門学校で……19
振り返って……21
英語への憧れ……24
スキーのこと……27
初めて海外へ……36
在学三年間と尊敬する先生……37

昭和十年――昭和二十年（一九三五―四五年）　45
社会人となる……46
女工哀史の実態をつぶさに見た……50
ついでに余談……53
山村の生活……54
朝鮮北部の清津工場へ転勤……58
中國ビール会社へ赴任……60
敗戦……63
運命……64
敗戦後の上海で、収容所の生活……65
敗戦までの上海、ビール会社のことなど……67
戦時中、会社での体験……71
外国語のことと関連して……76

敗戦後の上海で考えたこと、白系ロシア人のことなど……79
国民性と様々な初めての体験……82
昭和二十一年（一九四六年）以降……89
日本へ引き揚げる……90
回想―引き揚げ船の中で……92
本社の渉外課勤務……94
回想―中国人との交流……96
意欲の持続ということ、私の考え方……98
社会への還元、奉仕の精神……102
岡松家へ入ってから……106
失敗談　銀行との付き合い……115
昭和五十一年（一九七六年）以降……119
種を播く……120
今は出発の準備期間……127
「本」は民間外交の主役……131
試行錯誤を重ねながら……133
余談……135
「本」の寄贈の概略……136
ドゥーイング ビジネス イン ジャパン（Doing Business in Japan）と比較法研究センター……144
寄贈先リスト……145
実父の死について……166
選んだ道……169
抱負……172
あとがきにかえて……174
感動の人……高木太郎……177

大正二年——昭和九年（一九一三—三四年）

生い立ち、幼年の頃

私は大正二年（一九一三年）六月三十日、神戸市（長田区宮川町）で生まれた。父の仕事は農業、健康な父母をもち健やかに生まれたという。その時、兄が一人姉が一人、私は二男、そして大正五年に弟が生まれた。

神戸市といってもその当時は今のような都会ではなく完全な郊外地で、大正九年（一九二〇年）頃から私の家の周辺が開け始めて来た。それまでは全くの田園風景で、その中を私は遊び回って育った。と言っても五歳ぐらいまでのことは殆ど記憶になく、ただ隣にお宮があり、これが神戸の長田神社で、祖父に連れられて一、二回遊びに行ったことを覚えている。

小学校に入ってからは、家のすぐ下の川でよく遊び田んぼを駆け回ったり、野原でとんぼを採ったり神社の杜で蟬とりをしたり、自然を相手に友達と心ゆくまで遊んだ。当時のことだから繁華街へ映画を観に行くとか食事に行くとかは一切させてもらわなかった。これは父の教育方針でもあったのか、そういう意味では非常に質素で、ぜいたくは一切しな

い生活を父自身が実行していたのである。また、父の仕事は非常に忙しく勿論母も忙しく、両親とも子供達を余りかまってやる暇など殆ど無かったのだと思う。だから子供達は自然に自分で何でもやらなければならない様になっていた。母は田んぼに行って仕事をすることもあったが、家族の食事、着る物の世話など家事全体をこまごまと、それも本当に几帳面にやっていたことを子供心によく覚えている。このように母親もずい分よくやってくれたが、やはり印象に強く残っているのは父親の方である。男性同志の気持ちというのであろうか。だが現代のような母親の溺愛、父親の甘さというのは無く、どこかへ遊びに連れて行ってくれることなど、小学生時代は先ず無かった。しかしこの時代、都市で生活するほんの一握りの家族以外はそんな風潮も無かったのだが。だから子供達は学校から帰ると、近所の友達と前述の通り鬼ごっこ・魚釣り・どんぐり拾い・木登り・水遊びなどなど…。その頃の自然の風景は今も目に心に鮮やかに残っている。

一度こんな事があった。小学校の三年生ごろ川で遊んでいて滝壺のような深みにはまってしまった。余り泳げないのでもうどうしようもない。あっ溺れる！と思って前を見たら友達がいた。「手ぇ引っ張ってくれ！」と夢中で叫んで引き上げてもらった。他の友達はもう着物を持って川の堤を歩いて帰ろうとしている時だった。

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

偶然にまだ川に残っていた友達がいなかったら私は溺れて死んでいたことだろう。この事は忘れられない。川は長田神社の横を流れていたからか宮川と呼ばれていた。今この辺りは神戸市の中心部となっている。宮川は現在も流れている。

長田神社から北は田んぼだけで家は殆ど無く、昔からの古い部落がちょろちょろと残っている程度だった。それが大正九年（一九二〇年）の欧州大戦のあおりの好景気で神戸はいっぺんに華やかになった。そしてこの界隈にも家がどんどんと建っていった。現在この京都の近郊の農家がガレージになったり、空き地に新しい家が建ったりして急ピッチで様子が変わって来ているが、これと同じ状況を大正九年から大正末年頃にかけて私は体験した。それは父を通じて眺めさせてもらったことであった。

父のことと私の精神生活の根っこ

父が米作りと畑づくりをやっていた時代には、勿論、機械は一切無しに総て人力の作業だったから、朝は早くから夕べは遅くまで、殊に収穫期になると晩の八時、九時まで仕事を続けていた。本当に星を戴いて帰って来るという状態であった。田んぼは家から一キロ

余り離れた所にあったので、夜遅くなった時など私達は母親に連れられ提灯をもって家から六、七百メートルぐらいの所まで父を迎えに行った。夜の八時頃だったろうか、遠くから荷車の音がカラカラ、カラカラと闇の中から聞こえ、だんだんとこちらへ近づいて来る。母が「ごくろうさん」と父に挨拶していたのを覚えている。

家の周辺が全部ひらけてしまってからは、父は今まで通りの農業が続けられなくなっていた。父は明治十二年の生まれで、もう相当の年齢だったが、ごく一部の、面積にすれば百二、三十平方メートル程の土地を残し、そこで自分の腕に覚えのある菜園を作り　晩年から亡くなるまで、ずっとそこで仕事をしていた。長い間の経験で農作物を育てるのは非常に上手だった。

父は質素な生活を実践して、子供達は小さい時から無言のうちに教えられていた。こづかいを使うこと自体きびしく規制されていたから、親からこづかいをもらって友達と遊びに行くなどということは一切させてもらっていない。だから総て自分の足を使って行ける範囲で、近所の腕白小僧達と一緒に山登りをするとか、時には弁当を持って行くとかが、精いっぱいの遠出だった。この様な子供時代を過ごしたのだが、それはこの時代ではごく普通のことであったと思う。

私の家は全くの貧乏ではなかったが、恐らく、父の幼い頃の日本は国自体が貧困のため、国民がぜいたくをしない様に、極めて質素な生活を強いられ、子供達にも自分達がやって来たことをそのままやらせたということであろう。それにもかかわらず、父は子供達に大学まで行くことを熱心に勧めてくれたのである。この時代、中学校まで行けば堂々たるもので相当の学問をした人と世間一般が認めていた。殆どの子供は小学校を終えたら直ぐに働いていたし、又そうしなかったら生活が出来ない国の状態であった。そんな時代に私の兄は京大の工業化学科を出たし、弟は東大の応用化学科を卒業している。私は余り勉強が出来なかったから岐阜の高等農林学校の農芸化学へ進んだ。でも父は熱心に私に大学へ行く様にと勧めた。その点、父は本当に立派だったと思っている。

その頃、大学卒のサラリーマンの月給が五十円ぐらいだったが、我々兄弟三人の入学金や学費が、月五百円ぐらい必要な時もあったのに、それでも父は是非行けと勧めてくれたのである。口には出さなかったが、高等小学校を卒業しただけの自分がかつて体験したつらさ、殊に後述する軍隊生活三年間に味わった辛酸が、子供達にはこんな目に会わせたくないという強い気持ちにさせたのであろう。だから子供達には学問を、それも最高学府を終えさせたいと熱望していたのだと思う。子供のことを常に頭において考えてくれた本当

の意味での父親の深い愛情であった。

父は実に様々な試練を経て生活して来た人である。徴兵制度で普通の健康体の成年男子は二十歳から三年間、軍隊に入って猛訓練を受けた。明治三十三年頃の父の場合の軍隊生活を簡単に述べよう。兵隊には二等兵・一等兵・上等兵の三つの階級がある。最初は二等兵、同期に入隊した者を同年兵と言うが、三年目になると大勢の同年兵の中から上等兵が選ばれる。父は同年兵の中でも抜きん出て、その上の上等兵候補者を選ぶ伍長の立場になっていたが、それは非常な努力の結果であった。いわゆる軍隊では重い銃を担いで激しい訓練をするから先ず体力に自信がなくてはならない。更に学科試験がある。昼間のもの凄い激務で夜は綿のように疲れ、寝床に入ったらすぐに眠ってしまう状態のところ、父は睡眠時間をさいて学科試験にそなえて勉強をした。当時の兵舎には電燈がなく小さな油皿に灯芯を浸した小さな明かりがあるだけ。それも部屋のは時間がくると全部消してしまう。父はこっそり抜け出して便所へ行き、そこの小さな明かりを頼りに勉強した。真冬は余りの寒さに臀部やももが痙攣(けいれん)を起こしたという。そしてついに学科もいい点を取ることが出来、三年目に上等兵選抜者に選ばれたのだ。

軍隊で小隊と言えば一つのクラス、中隊は一つの学年に相当する。その中隊の中での三

人の選抜者である。一番官位の高い人が大尉、学校で言えば教師で大体高等教育を受けた人、次に助手クラスで中学卒の兵隊、そして父、父は高等小学校きり卒業していないがこの三人に加えられたのだ。父は実科は何をやっても勝れ、更に意志の力でそういう立場に回ることが出来たのである。軍隊の中でのこうした努力がどれ程つらく厳しいものであったかは想像に余りある。父は三年間、この立場で頑張って責務を果たしてから除隊となり、帰宅したが、すぐに日露戦争が起こり、一年ぐらいしてから召集され戦地に行った。一緒に行った中隊の上官達は皆戦死したという。父は有名な奉天の開戦に先立つ遼陽の戦闘が終わる二時間ほど前に負傷して護送された。もし奉天の開戦に参加していたら恐らく戦死していただろうと、言っていた。幸運というのか、危く命拾いをしたのだ。広島の病院で一年ほど生死の境を彷徨したが根が丈夫だったので生きて戻ることが出来たという。

明治三十九年、父は私の母、良(りょう)と結婚。母は今で言う十七歳だった。その後のことは前に述べた通りであるが、父は自分があらゆる困難にめげず耐え忍びうち勝って来た人なので、私達男の子がちょっとのことで文句を言ったりすると、それはもうこっぴどく叱られた。だが、軍隊というのはもの凄い鉄拳制裁のある所で、父が軍隊の中でそれをやったかやらなかったかは聞かなかったが、私達を殴ることはしなかった。

私は小学校を卒業するまで散髪屋へ行ったことが無い。学校から昼飯を食べに帰って来ると、そのほんの二、三十分の間にカッカッカッと父に散髪された。それはもうひどい虎刈り。頭と髪を引っ張られて「痛い！痛い！」と言ったら叱られる。どれだけ怒鳴られたことか。父にしたら、男のくせにこのぐらいの事でと歯がゆくて仕方がなかったのだろう。散髪では本当によく怒られた。万事がこんな具合いで絶対に甘やかしてはくれなかった。

それから又、父の偉かったと思うのは、軍隊で整理整頓を徹底的に叩き込まれたのを一生身につけていたこと。例えば一番つまらない物から一番大切なものまでクラスに分けてちゃんと保管していて、その時々にきっちりと使い分けをする。相手によって自分がそれにふさわしい状態にもってゆくやり方が見事だった。九十三歳で亡くなったが、死の間際まで意識は全然衰えず、昏睡状態になるまでこの習慣はきっちりと残っていた。

その時々に示された無言の教えが、私には凄く大きな深い根っこになってドスーンと腹に入っている。私が今日こうしてあることは、父のやっていた行いや精神に自分がどこまで近づくことが出来るかやってみようという一つの筋があるのと、いままでに会った立派な人達や、尊敬する恩師から受けた教えを宝として、自分なりにいろいろと思索し、今度は自分がどうあるべきかを決めて実行していることによる。生きるために絶対に必要なも

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com